

News

vol. 10
2003.NOV

島根県古代文化センター



松江市平所遺跡出土
(重文：見返りの鹿埴輪)



新発見

青木遺跡出土 神像

出雲市東林木町

何やら厳めしい顔に冠をかぶり、手には笏しやくを持ち、背筋をピンと伸ばした凛々しい姿…。写真は、このたび出雲市東林木町にある青木遺跡から発見された、古代に遡るとみられる木彫りの神像です。

青木遺跡は、道路開発に伴い平成12年度から島根県埋蔵文化財調査センターが発掘調査を行っている弥生時代から江戸時代にかけての大規模な複合遺跡です。

発見された神像は高さ13.5cmの小形のもので、奈良時代後半から平安時代初め頃の土層から出土しています。年代についての詳しい調査研究はこれからですが日本最古級の可能性が高いと言われています。

神様の姿形を木彫りで表現した神像は、仏教伝来以後、神仏習合の中で、仏像の影響を強く受けて造られるようになったと言われています。本来ならば神社や寺院の建物内で大切に伝世される信仰の対象が、遺跡から発掘調査によって発見されることは極めて珍しくとても興味深い事例です。

きびしい眼差しは、私たちに古代人の神仏に対する心の営みを静かに語りかけてくれるかのようです。

(写真提供 島根県埋蔵文化財調査センター)

しまねの「古代文化」を全国へ

歴史民俗博物館・古代文化研究センター (仮称)

整備だより
vol.1

●歴史民俗博物館

歴史民俗博物館は、平成18年度末の開館を目指して整備を進めており、施設整備にあわせて展示資料の収集や調査・研究など博物館の具体的な内容も検討しています。今後、整備状況や研究成果などについて、このセンターニュースで随時報告していきますので、ご意見などありましたらよろしくお願いします。

- ◎設置場所 篠川郡大社町 出雲大社東隣
◎施設の概要 建物本体面積：9,806m²
・展示エリア：約3,000m²



「歴史民俗博物館」の完成予想図

展 示 室		展 示 内 容
常 設 展 示 (三室)	① 総合展示室	趣 旨： 島根の原始・古代から近現代に至るまでの歴史と文化の特性を、人々の生活と交流の姿を中心に時代の変遷とともに概観する。 タイトル： 「島根の人々の生活と交流」 内 容： 独自の発達を遂げた出雲の王墓「四隅突出型墳墓」、全国最大級の古代の玉生産地「出雲の玉作」、日本を代表する鉱山遺跡「石見銀山」、全国一の鉄生産量を誇った「島根のたたら製鉄」などをはじめとして古代から近現代に至る資料を取り上げ、島根に生きた人々の生活と幅広い交流の姿を明らかにする。
	② テーマ別展示室	趣 旨： 青銅器、出雲国風土記、出雲大社など島根の特色ある古代文化の展開を、3つのテーマに再構成し、現代に息づく古代文化の姿を探る。 タイトル： 「出雲大社と神々の国のまつり」 巨大神殿出雲大社の謎を中心として、現代に息づく古代文化を継承してきた島根に生きる人々の心の営みの歴史を、様々な角度から総合的に明らかにする。 内 容： 発掘された巨大柱や本殿復元模型等をもとにかつての大社（おおやしろ）を再現。また全国八百万の神々が参集する出雲の“神在月”や、日本中に広がる“えびす様・だいこく様”など出雲の福神信仰の謎に迫る。 タイトル： 「出雲国風土記の世界」 古代の地域の様子がいきいきと描かれた『出雲国風土記』を手掛かりに、当時の自然や景観の中で育まれた“くらし”をさまざまな角度から概観する。当時の人々がどのような暮らしを営んできたのかを復元的に展示するとともに、現代のくらしにも息づく古代文化を探る。 内 容： 全国唯一の完本である『出雲国風土記』の写本や関連する考古資料を展示し、風土記の内容や意義を探る。また当時の人々の生業やくらしの様子を、朝酌の“渡し場”や“市”の復元模型により再現。 タイトル： 「青銅器と金色の大刀」 島根県は弥生時代の青銅器出土量が全国屈指であることなどから、青銅の国とも呼ばれている。また古墳時代後期には、古墳の石室などに中央の影響を受けながらも独自の古墳文化を展開している。この弥生青銅器と古墳から出土した装飾大刀の持つ意味を中心に、地域社会のまとまりがどのように形成されてきたのか明らかにする。 内 容： 日本最多の出土数を誇る国宝・荒神谷遺跡出土青銅器、重文・加茂岩倉遺跡出土銅鐔を一堂に展示。また古墳時代後期の金銅装の装飾大刀も多数展示し、独自の文化を育んだ古代出雲の社会構造に迫る。
	③ 神話展示室	趣 旨： 神々の国、神話のふるさととも呼ばれる島根県。この島根を舞台とした神話伝承をわかりやすく紹介し、来館者がそれぞれの立場で神話のもつ意味について考える機会とする。 タイトル： 「出雲神話回廊」 内 容： 『出雲国風土記』や『古事記』に記された神々の物語を映像ルームのアニメやCGで紹介。神話学習パソコンや書物・絵画により神話の世界を体験する。
	④ 企画展示室	趣 旨： 古代文化研究センターの調査研究成果を再構成し、様々な手法を用いてわかりやすく展示する。また、他館企画の優れた展示や巡回展などを誘致するとともに、他の博物館・資料館との共同企画による展示を行う。

⑤ 収蔵エリア：島根の歴史・文化に関する資料の収集・保管を行う

⑥ 交流エリア：学校教育や生涯学習と連動した体験学習・講演会などを実施する

⑦ 管理・学芸エリア：博物館の事務管理及び収蔵資料や博物館の諸活動に必要な調査研究を行う

⑧ エントランスホール・展示ロビー：エントランスには喫茶コーナーや展望台を設置

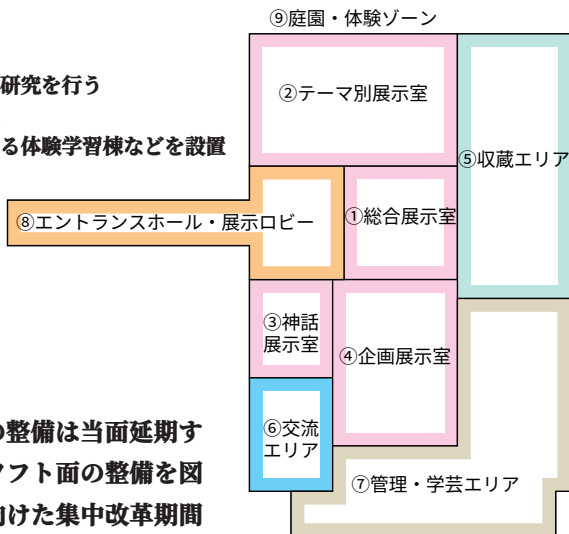
⑨ 庭園・体験ゾーン：風土記をイメージした庭園や、民俗芸能上演や体験学習ができる体験学習棟などを設置

【歴博整備スケジュール】

H14年度	H15年度	H16年度	H17年度	H18年度	H19年度
基本設計	実施設計	建築工事		★開館	
		●起工式			

●古代文化研究センター

古代文化研究センターは、県の厳しい財政状況に鑑み、新しい建物の整備は当面延期するものの、既存の施設を活用しながら調査研究機能を充実させるなどソフト面の整備を図っていくことになりました。施設整備については、県の財政健全化に向けた集中改革期間である平成17年度中に、改革の成果などを踏まえてその後の判断を行うことになりました。



歴史民俗博物館の館内模式図

古代文化センター新収蔵資料のご紹介

■ 御師 の 資 料 (高浜家文書) ■

江戸時代の出雲大社では、千家・北島両国造家を中心に、300人を超える社家の人々が奉祀、運営にあたってきました。その中に、「御師（おし。太夫ともいう）」という役割を担当した社家がありました。御師といえば、伊勢神宮の御師が有名ですが、残念ながら出雲大社の御師については、明治以降、御師を勤めた家の資料のほとんどが散逸してしまい、従来ほとんど調査がなされておらず、未解明の点が多く残されています。

出雲大社の御師は、①布教活動（全国各地に「壇場」（布教ブロック）を持ち、出張期間中、各種出雲大社の御札を信者に配布。玉串料を徴収）、②旅館営業（壇場の信者が出雲大社に参詣した際、旅館業を兼ねる自分の家に宿泊させ、正式参拝の手配、神社の宝物の観覧の手配などを行う）を主な役向きとしていました。いわば、出雲大社と庶民との縁を結ぶ仲介役を果たしていたことになります。壇場には、「出雲講」「龍神講」など、いくつもの「講」（信者団体）が結成されましたが、講の分布は、幕末には蝦夷地（北海道）の函館・松前・江差にも及びました。

古代文化センターではこのたび、歴史民俗博物館・古代文化研究センター整備事業の一環として、北島国造家に所属していた御師・高浜（田中）家の古文書を一括購入しました。これにより、御札や玉串は現地で作成し、五穀豊穡の祈願から地鎮祭まで各種の祈祷も行っていたことなど、壇場での詳細な布教活動の様子が明らかになってきました。

現在調査を進めている高浜家文書など御師関係資料については、来年度末に調査研究報告書として刊行する予定です。

（岡 宏三）



『子枕三省記』（豊前国〈福岡県〉を壇場とした高浜家の布教日記）

威信財

博物館みてある記①

東京でトルコ三大文明展を見ました。

三大文明という中に、ヒッタイト帝国、オスマン帝国があるのは当然ですが、ビザンツ帝国が含まれていたのにはいささか驚きました。ビザンツは、ギリシア正教を国教とする国だから、イスラム教徒のトルコ人から見れば異教徒の征服王朝ではなかったのか。同じトルコ文明として括り得るものなのでしょうか？

そのことはともかく、展示品のすばらしさにはとにかく圧倒されます。紀元前2000年という、日本でいえば縄文時代に相当する時期に製作されながら、驚くべきリアルな動物装飾が施された食器。銃身にまで宝石をちりばめた銃。景德鎮をベースに種々の宝石をあしらった水柱や瓶。しかしなんと言っても、極めつけは柄に特大のルビーを嵌め込んだトプカピのエメラルド短剣です。展示ケースの周囲からしきりと溜息が聞こえました。

まさにアラビアンナイトの世界ですが、実は、この短剣をはじめとして展示されているこの時期の豪華な品の多くは、スルタンが、その国力と自らの権力の大きさを敵国の

支配者に見せつけるための贈り物用に作ったもので、戦わずして相手を屈服させるのが目的だったとのこと。それでも「実際に戦争を行うことを思えば安いもの」と、解説板に記されたスルタンの言葉が何とも心憎く感じられました。

ふと、わが日本の古代の銅剣や銅鏡も同じような使われ方をされたことがあったのではないかという思いが頭をよぎりました。土器や木器しか目にしたことのなかった弥生人が、燦然と輝く金色の品々を初めて目にしたときの驚きと所持者への畏怖の念はいかばかりであったでしょう。物的な豊かさへの驚嘆ばかりではなく、胸に鏡を翳した女性を太陽の分身と見たり、煌めく弓先の眩さに恐れをなして軍門に下るようなこともあったのかもしれない。

いずれにしても威信財とはかくなるものかと思ひしらされる絶品です。（「トルコ三大文明展」は12月7日まで福岡アジア美術館で開催中、12月20日から来年2月16日までは大阪歴史博物館）

（センター長 槻谷敦文）

古代文化センター出版物のご案内

古代文化センターでは、調査研究の成果を様々な書物として出版しています。
ここでは残部の少ない書籍や最近刊行された図書の一部を御紹介します。

残部僅少！



◆古代文化叢書5 『出雲国風土記とその周辺』

5,000円
(送料380円)

『出雲国風土記』の研究に多大な業績を残された朝山皓氏の論文集。『出雲国風土記』に見える動植物や近世出雲において風土記研究

に業績を残した国学者に関わる論考を収録する。『出雲国風土記』におけるこれらの研究については、氏の業績がほとんど唯一であり、氏の研究を凌ぐものはいまだに見あたらない。本書を抜きにして近世における「風土記学」の展開を論ずることはできない。巻末に古代出雲の詳細な復元地図を載せる。『出雲国風土記』研究を志す人々にとって必携の書。

残部僅少！



◆古代文化叢書6 『出雲の 神信仰と祭り』

3,000円
(送料380円)

朝山皓氏の著作論文のうち、出雲の信仰や祭礼に関わる論文を可能な限り多く採録。神葬祭や神在祭に関わる論考は圧巻であり、関連

史料を網羅して他の追従を許さない。幣頭制度など出雲の神社史を理解する上での必読の文献も多数採録。島根の古代文化や祭礼・芸能などの研究を志す人々にとって必携の書。

新刊！



『しまねの 古代文化』 第10号

800円
(送料310円)

古代文化講座の講演記録と神在月シンポジウムの記録集。言語学の泰斗、上村幸雄氏と藤岡大拙氏の出雲弁に関わる講演や陣幕久五郎

没後100年を記念して開催された相撲の歴史に関わるシンポジウムの模様を採録。出雲弁や相撲を愛する人々にお勧めの1冊。

新刊！



◆調査研究報告書17 『大土地神楽』

1,000円
(送料340円)

神話の里、大社町に伝わる県指定無形民俗文化財「大土地神楽」に関わる調査研究報告書。大土地神楽に関わる写真や神楽古台本などの関連史料を可能な

限り採録し、石塚尊俊氏・山路興造氏・白石昭臣氏を始めとする斯界第一人者の滋味豊かな佳編をも収録する。神楽をこよなく愛する人に一読をお勧めしたい1冊。

お求めは

島根県文化財愛護協会

(松江市殿町1番地 島根県教育庁文化財課内 TEL 0852-22-5879)

ほかに島根県立博物館 (TEL 0852-22-5750) でも販売しています。



調査研究事業最新情報

祭礼行事 調査から

三葛神楽の調査

匹見町紙祖

民俗芸能調査では、本年度に三葛神楽（美濃郡匹見町大字紙祖字三葛。昭和50年に島根県無形民俗文化財指定）の報告書を発行する予定です。この神楽については、古代文化センターでは平成5年にビデオと写真とで記録撮影しており、ビデオも短・中・長編の3作品が完成しています。ところが当時は個別の神楽についての報告書を刊行していなかったため、改めて今年度に作成することにしたものです。

氏子による神楽としての三葛神楽は、明治27年頃、匹見八幡宮神主の斎藤真澄・同幸太郎の父子から伝授を受けて始まりました。その後石見西部の神楽が八調子式のものに変転していく中でも、従来からの舞の手を受け継ぎ、今も自らの芸風を「六調子打ち切り」と呼んでいます。「帯舞」「柴清目」「貴船」等、稀少となった舞も保持しています。報告書刊行を通して、石西地方の旧来からの神楽舞の姿を追求してみたいと考えています。

（中上 明）



「鍾馗」

タクリで飾った冠の鍾馗と、般若面の疫神は珍しい



「貴船」

憎い夫の藁人形を、呪う女が見つめる



調査成果をみなさんに説明しているところです



地下構造の部分（本床・小舟）です

地域間交渉 調査から

◆^{あたいだに} 銚谷たたら跡の発掘調査

江戸時代後半から明治時代にかけての島根県のたたら製鉄は、自然に恵まれた風土を活かして行われ、品質の良さや全国一の生産量を誇っていました。

この特色ある歴史文化を明らかにするため、古代文化センターでは歴史民俗博物館の展示計画もふまえ、島根県埋蔵文化財調査センターと共同で江津市銚谷たたら跡の発掘調査を8月末から9月にかけて行いました。江の川に面した谷間にある銚谷たたら跡は、明治時代、浜田市出身の俄国一博士が調査し、主要建物や設備が記録されたことで広く知られています。

調査の結果、たたら製鉄の主要建物の位置や内部の様子が判明し、新たに地下構造も明らかになりました。建物の規模や設備が俄博士の調査記録と一致したため、銚谷たたら跡は多角的にたたら製鉄の実態を探ることが可能な遺跡といえ、注目されます。今後は道具類や他地域との技術交流なども視野に入れて研究し、その成果を公開してゆきます。

（目次謙一）

古代史の宝庫を掘る

出雲市青木遺跡の
発掘調査速報展

国道431号道路（東林木バイパス）改築事業に伴い、島根県埋蔵文化財調査センターが平成12年度から発掘調査を実施している出雲市東林木町の青木遺跡では、これまでに弥生時代の四隅突出型墳丘墓、近畿式銅鐸の破片、奈良時代から平安時代にかけての多量の墨書土器や木簡、絵馬、神像などが出土し話題を呼んでいます。

そこで、島根県立博物館では、このたび島根県埋蔵文化財調査センターの協力を得て、常設展スポットコーナーにおいて、青木遺跡の中間報告を兼ねた速報展を開催することにいたしました。

弥生時代から奈良・平安時代を中心とする時期の多種多様な出土品を一堂に集め、発掘されたての新資料によって「古代史の宝庫」青木遺跡の謎解きに迫ります。

現在、発掘調査中の遺跡であり、展示中にもまた新たな発見が報告されるかもしれません。どうぞご期待下さい。ここでは、速報展に先立ち最新の調査成果の一部をご紹介します。

それでは、皆様のご来館を心よりお待ちしております。

青木遺跡の最新成果から

(1) 日本最古級の木彫神像が出土（表紙参照）

(2) 石敷きの井戸跡を確認

湧水点らしき地点に径約60cm四方の小規模な木製の井戸枠を検出。二重の木枠や周囲の石敷き、汲み上げの位置にみられる踏み石の存在から非常に丁寧に造りがうかがえる。祭祀場、あるいは祭祀に使用する聖なる水を汲み上げた井戸だろうか。

(3) 果実を充填した甕5個が出土

モモ、スモモ、ナシという果実を満ちた土師器のカメ5個が土中の穴から出土。礎石建物の北東側（鬼門か？）に接して埋められており、地鎮のために供えられたものだろうか。

(4) 建物跡8棟が出土

柱材が残る掘立柱建物跡5棟を新たに検出。このうちには、「田」の字形に9本柱を配置し、周囲を石列で囲んだ特殊な高床建物も見られる。大社造と呼ばれる後世の神社建築との系譜関係をうかがわせる。

(5) 墨書土器・木簡・祭祀関係遺物が多数出土

墨書土器が280点、木簡10点があらたに出土。「伊」（伊努郷？）や「美」（美談郷？）など地名、神社名に関わる墨書土器、木簡も確認されている。また、斎串、土馬、ミニチュア土器など祭祀関係の遺物も出土している。



9本柱の建物



モモ、スモモ、ナシが納められた土師器

- 開催期間 平成15年12月16日(火)～平成16年2月1日(日)
(毎週月曜日、年末年始は休館)
- 場 所 松江市殿町1番地
島根県立博物館 常設展示スポットコーナー
- 開館時間 9:00～17:00
- 入 館 料 一般200円(160円) 高・大生100円(80円) 中学生以下無料
※()内は団体料金(20名様以上)
- 連 絡 先 0852-22-5750

※期間中は、一部展示替えを行う予定です。

編集後記

「古代文化センターって何するところ?」、とは博物館来館者の皆様からよく聞かれる言葉です。一言で言えば、「島根県の豊かな『古代文化』について様々な学問分野から調査研究して、広く内外に情報発信するところ」といえるでしょう。

現在、センターには考古学、文献史学、民俗学、宗教社会学、文化人類学など様々な専門分野の調査研究スタッフがいます。

古代文化センターの存在、ユニークな活動の姿を、皆様にもっともっと知っていただくため、これからも積極的な広報を行っていききたいと思います。(まくせ)

編集発行 平成15年11月21日

島根県教育庁古代文化センター

〒690-0887 島根県松江市殿町1番地 島根県立博物館内

TEL 0852-22-6727 FAX 0852-22-6728

URL <http://www2.pref.shimane.jp/kodai/>

http://nextthdmuseum.pref.shimane.jp/shimane_2.htm

<http://www.pref.shimane.jp/new/inishie/>

e-mail: kodai@pref.shimane.jp